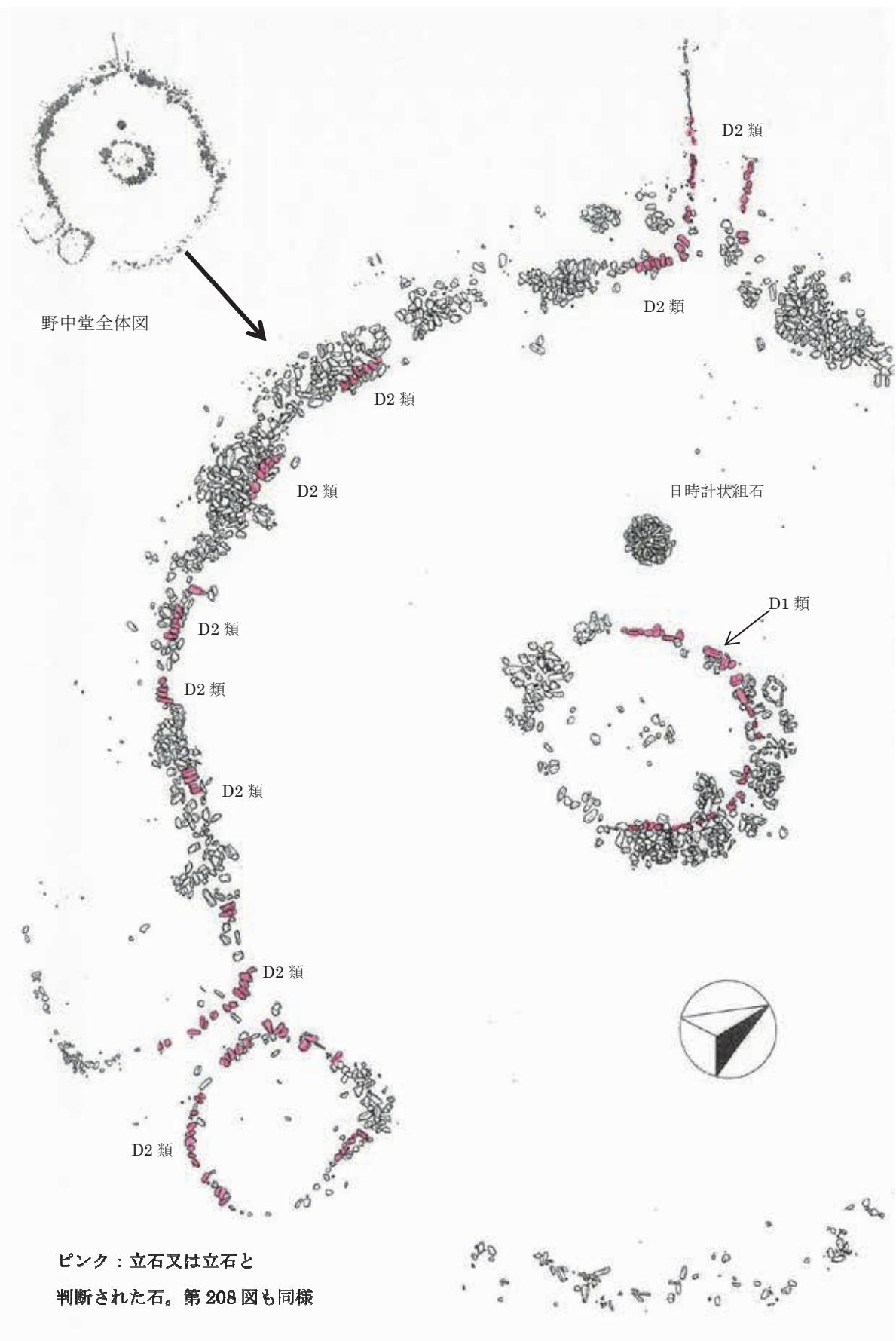
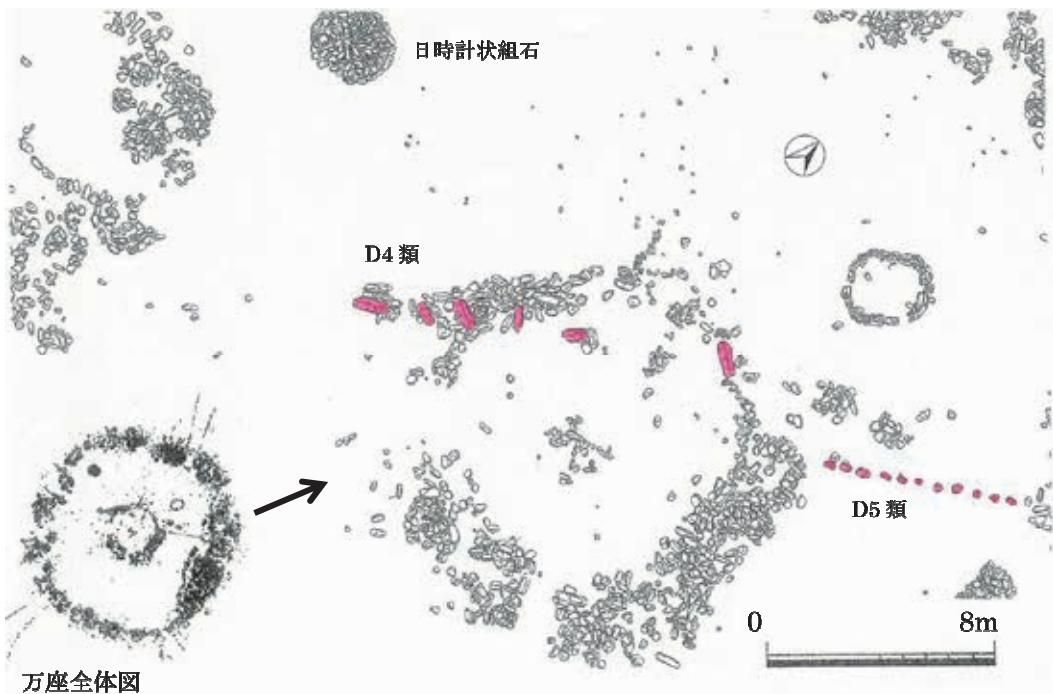


第 206 図 配石遺構配置図(万座)





第 208 図 万座環状列石の石列(内帶)

A2 類が圧倒的に多い点がある。万座環状列石に多く見られる A2-2 類は、一本木後口配石遺構群でも最も多く、万座・野中堂配石遺構群でも主体となる。野中堂環状列石内帶にみられる A1 類・C 類は、一本木後口等の配石遺構群ではあまり見られない。

環状列石を構成する配石遺構下について、昭和 26・27 年の国営調査において万座で 6 基、野中堂で 4 基の下部土坑を調査している。これらについて、規模や形状から墓坑との評価が与えられている。配石遺構下を調査したのは一部であり、調査した中には下部土坑が認められないものもあったが、配石形態や一本木後口配石遺構群の調査成果等から、両環状列石を構成する配石遺構の多くは配石墓と考えられる。

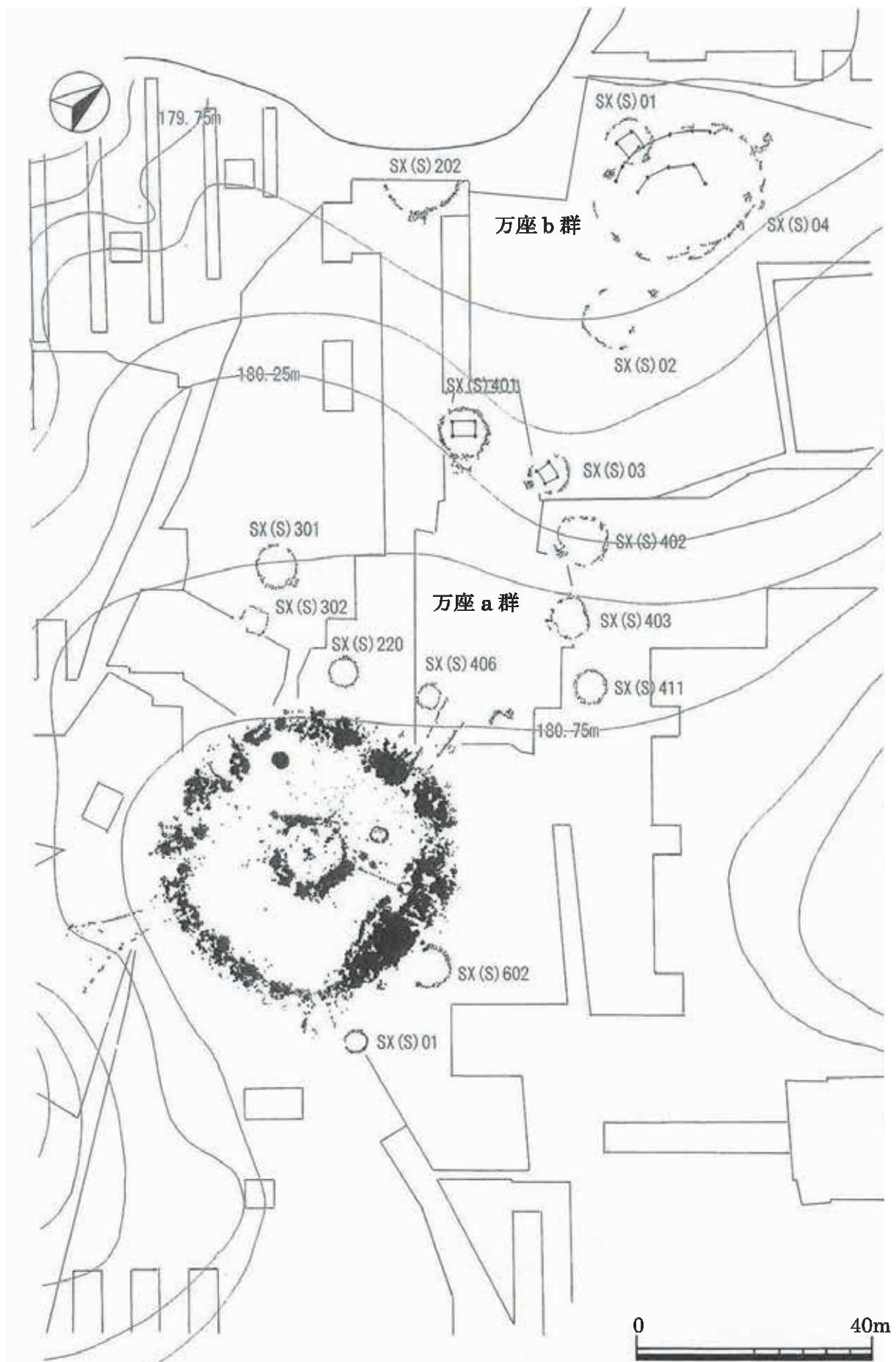
各環状列石の時期については、環状列石を取り囲む遺物集中域出土土器の傾向から、いずれもⅢ群 3 類～4 類期にかけて構築されたと考えられるが、野中堂環状列石ではⅢ群 3 類が、万座環状列石ではⅢ群 4 類がやや多く認められる。

③ 環状配石遺構（第 209 図、210 図）

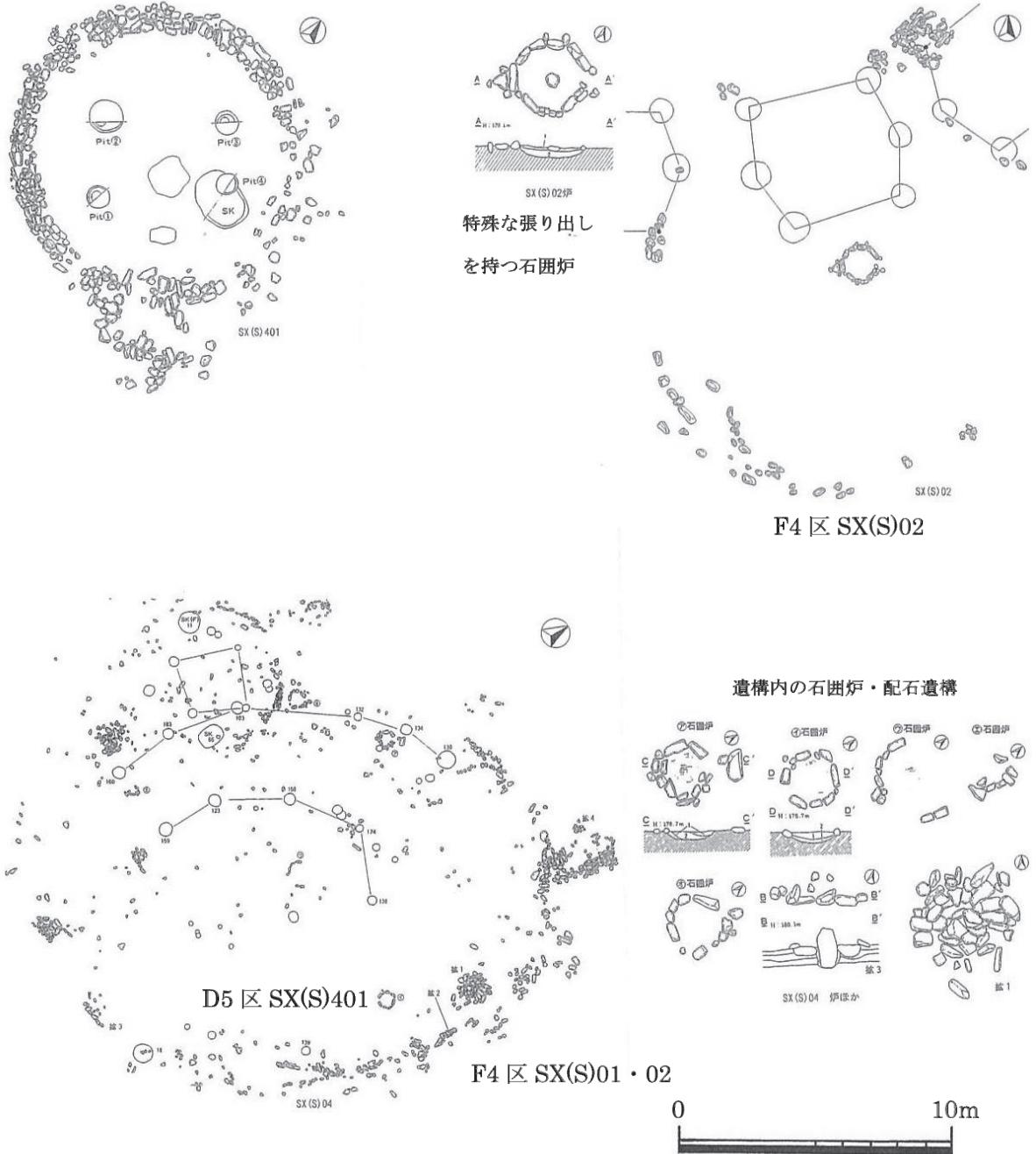
大湯環状列石（1）では、形状で環状と方形に分けて報告したが、構造や分布の類似から一括して扱う。計 17 基確認した。分布域は万座地区に万座 a 群、同北側地区に万座 b 群があり（第 209 図）、他の地区では検出していない。

万座 a 群、「こ」字状に配置され、張り出し施設は「こ」の中心を向くが、中心部に遺構等は確認できなかった。万座 b 群は、台地北縁の沢地を意識した配置を示す。群内で同種の大小の遺構の重複がみられ、小型のものが新しい。

環状配石内部に柱穴、地床炉や石囲炉を有することから、覆屋を持った建物だったと考えられる。最大規模の F4 区 SX(S)04 は、長軸線を挟んで複数の石囲炉が対峙し、二重の半円配置をとる柱穴また配石遺構を伴う可能性が高く、他の同種遺構とは構造が異なる。



第 209 図 環状配石遺構分布図



第 210 図 環状配石遺構実測図

石囲炉は円形のものが一般的だが、F4 区 SX(S)02 炉（第 210 図）のように四方向に三角形の張り出しを持ったものがあり、本遺構の特異性を示している。遺構に使用する石材は、石英閃緑玢岩や安山岩が多く、砂岩がこれに続く。環状列石のものより小型の石材が多い。

新旧関係は、万座環状列石と同時期とみられる掘立柱建物跡群と重複し、本遺構が新しい。また、万座 b 群では大型から小型へと移行していく。これらから万座環状列石より新しく、構築時期は 2 時期に分かれると思定される。

構築時期について、F4 区 SX(S)04 に伴う確実な遺物として、VI類の広口壺（第 124 図 268）があり、遺構の重複と併せると万座 a 群・万座 b 群は III 群 6 類期の遺構と考えられる。下内野 III 遺跡では、同種の遺構に大湯環状列石 III 群 4 類・5 類が伴っており、この種の遺構の出現は後期前葉と考えられる。

性格については、特殊な形態の石囲炉や、大型の F4 区 SX(S)04 では内部に配石遺構を伴う可能性を有することなどから、これまで通り「祭祀的な要素の強い施設」として捉えておきたい。

④ 掘立柱建物跡・柱穴状ピット（第 211 図～219 図）

柱穴状ピット（以下「ピット」）は万座地区、同北側地区、同西側地区、野中堂地区で確認され、その総数は 2,600 個余である。

平面形は円形を基調とし、断面形は円筒状もしくは逆台形を呈する。ピット内の堆積状況は 4 形態に分類され、柱を抜き取った（空洞になった）後、その空間に土砂を埋め戻す（入り込む）例がある。

直径は 11 cm～100 cm 以上を測り、そのうち約 58% が径 21 cm～60 cm に納まる。大型のものには確認面から深さ 150 cm を測るものがある。土層断面で確認した柱痕径は太いもので 60 cm 余のものがあり、炭化材の同定から栗・カヤ（ススキ類）が構築材として使用されていた。

柱の規模や配置状況から柱配置を示すものが認められ、それらを掘立柱建物跡とした。環状列石内には、これまで柱穴状ピットやそのほかの遺構が存在しないとされてきた。『大湯町環状列石』に収録された配石下の土坑実測図に小ピットが図化され、野中堂環状列石の内帶・外帶間の写真には柱穴状ピットが映し出されている。一本木後口配石遺構群で配石下の土坑と重複した柱穴状ピットを検出したが「墓標用ピットとも断定できなかった」として報告した。

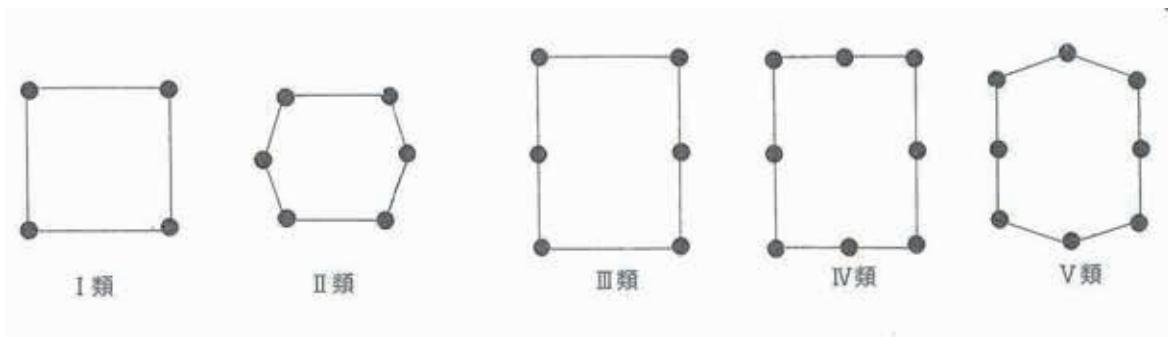
何らかの遺構が環状列石内に存在している可能性は極めて高い。

＜掘立柱建物跡＞

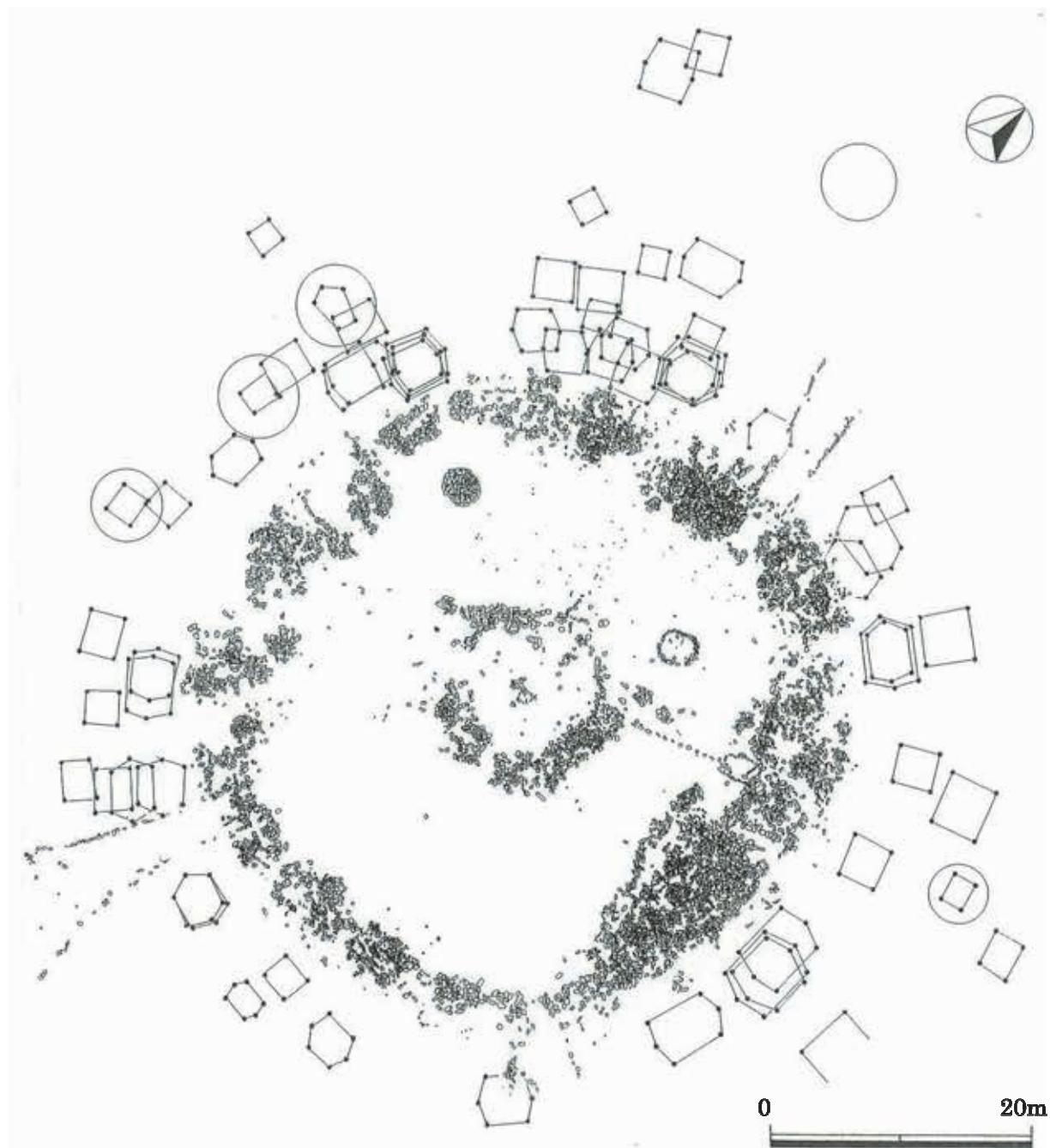
万座地区、野中堂地区、万座北側地区から合計 100 棟の掘立柱建物跡（第 212 図～214 図）を検出した。本報告書作成にあたり柱配置を再検討したが、新たに認定できるものを確認できなかった。柱配置から 9 分類した（第 211 図、215 図）。

建物配置の全容を把握できるのは万座地区と同北側地区である。野中堂地区については遺構保護のため北半部が未調査で、棟数や全体配置は不明である。

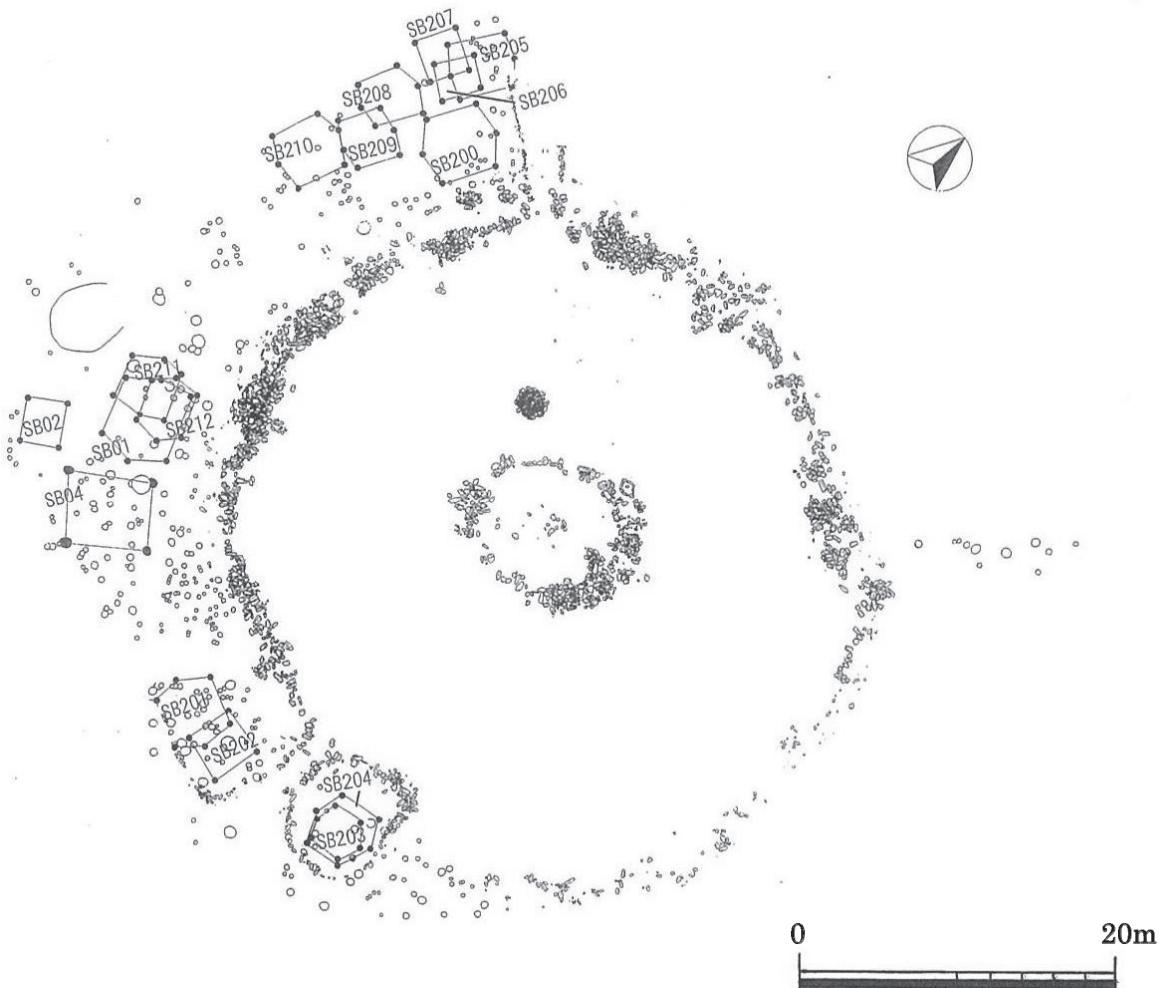
万座地区で 65 棟（第 212 図）を検出した。列石に隣接して II 類建物（6 本柱建物跡）が分布し、I 類建物（4 本柱建物跡）や環状に柱穴を巡らす形態のものはその外側に配置される。列石を取り囲む掘立柱建物跡は、基本的には I 類建物と II 類建物が主体となり、数棟から構成された群となり、環状列石外帶の配石群と対応し、列石外周に占地する。掘立柱建物跡は、列石中心から放たれた求心線に対して長軸が直交するように構築され、列石を意識した配置となっている。



第 211 図 掘立柱建物跡柱配置模式図(I類～V類)



第 212 図 万座環状列石周辺の掘立柱建物跡配置図



第 213 図 野中堂環状列石周辺の掘立柱建物跡配置

野中堂地区から 16 棟の掘立柱建物(第 213 図)を検出した。万座地区より分布密度が薄いが、万座環状列石と類似した配置状況を示している。

また、万座北側地区で検出された掘立柱建物跡は 14 棟で、II 類建物 9 棟が長軸方向を連結するように環状に配置(第 214 図)され、I 類建物 3 棟が南東部の内側に配置される。この遺構群は円環配置を呈するが、万座・野中堂環状列石地区の建物群のように中心的な存在(環状列石)を持たない。万座や野中堂環状列石と見比べると I 類建物跡と II 類建物の構築場所が反転し、この配置は一本木後口配石遺構群の内帶と外帶の配置に共通している。

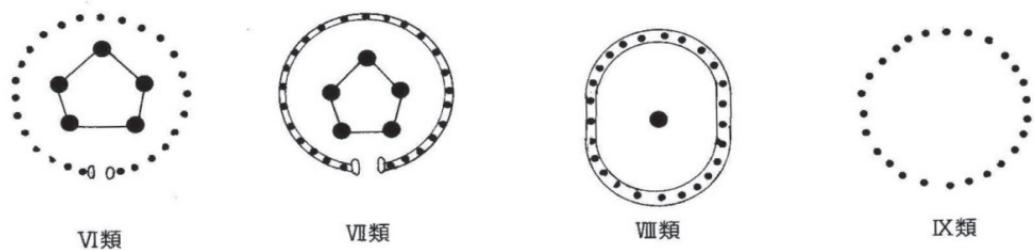
掘立柱建物跡について、平地式、高床式かを判断するため第 18 次調査時に硬度計を使用し、遺構確認面の硬度計測を行ったが、柱配置を示す内部と外部との硬度差は認められなかった。このようなことから、土間的な空間が存在しなかったと判断し、高床式を想定した。

掘立柱建物跡の構築時期は地区によって差がみられる。野中堂・万座地区の建物は環状列石を意識した配置を示しており、III群 4 類・5 類(十腰内 I 式古・新段階)土器及び III群 6 類(十腰内 II 式・III式)土器が伴うことからこの時期を、万座北側地区の掘立柱建物群は、F4 区 SX(S)04 の出土土器(第 112 図 81)から III群 3 類(十腰内 I 式古段階)の時期と考えている。

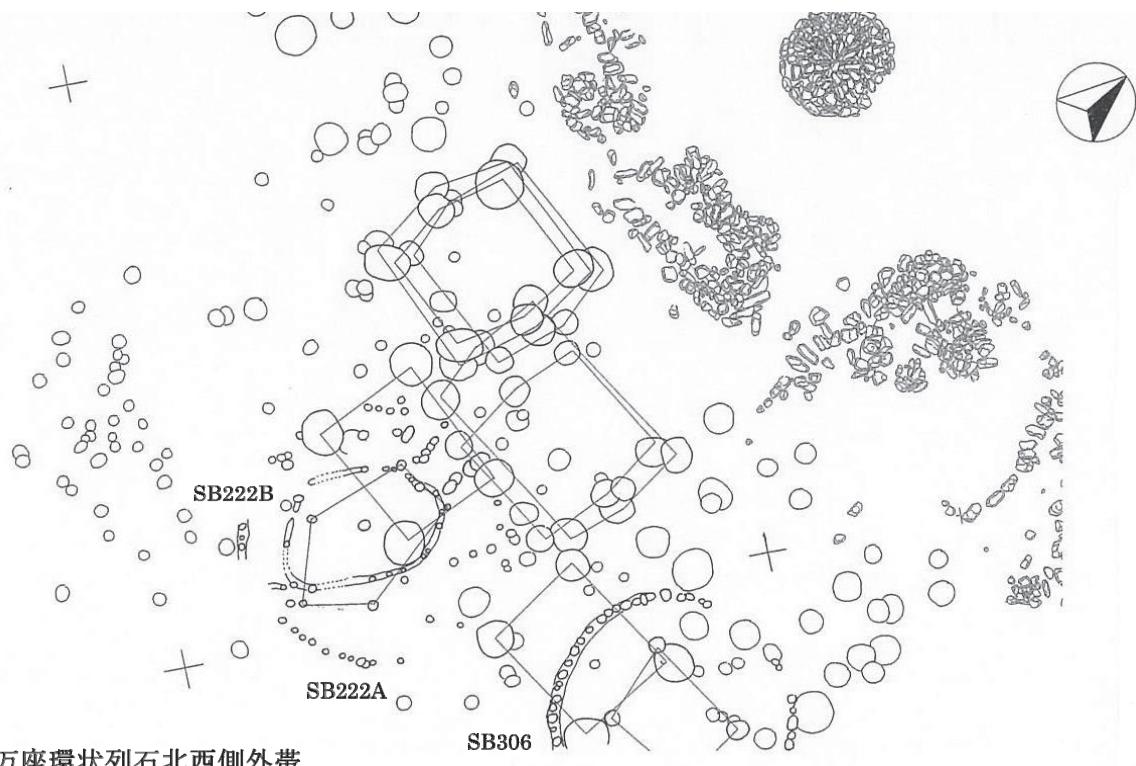
万座・野中堂環状列石については一本木後口配石遺構群の成果から「配石墓群」とし、第 4



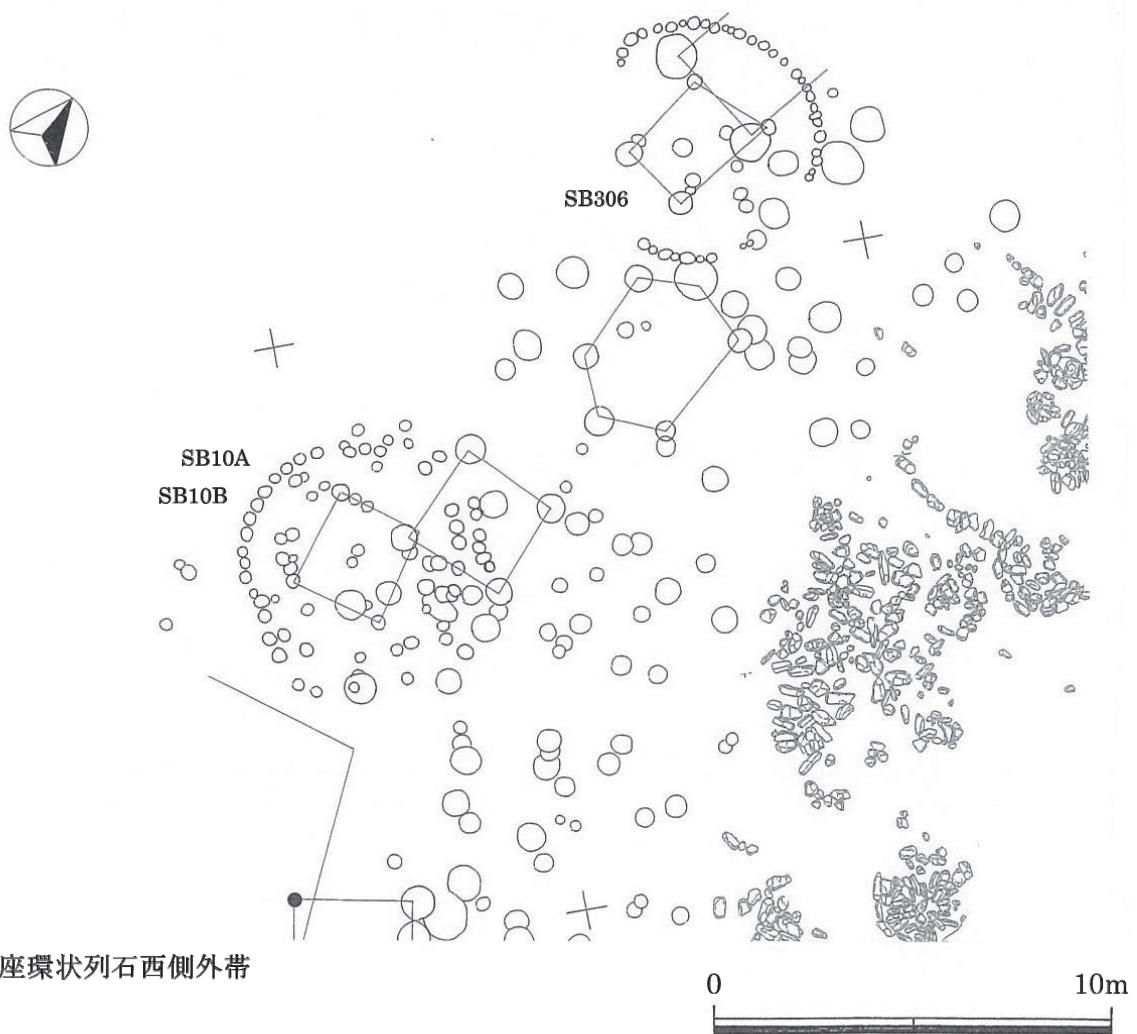
第 214 図 万座北側地区の掘立柱建物跡配置図



第 215 図 掘立柱建物跡柱配置模式図(VI類～IX類)



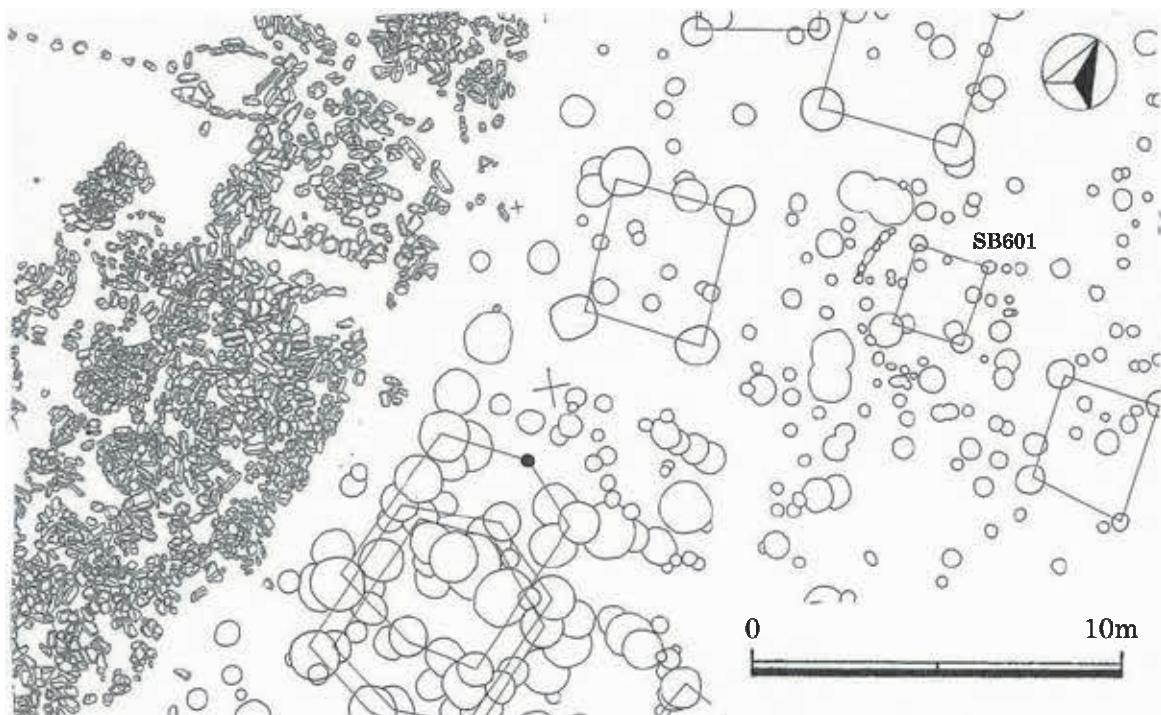
万座環状列石北側外帶



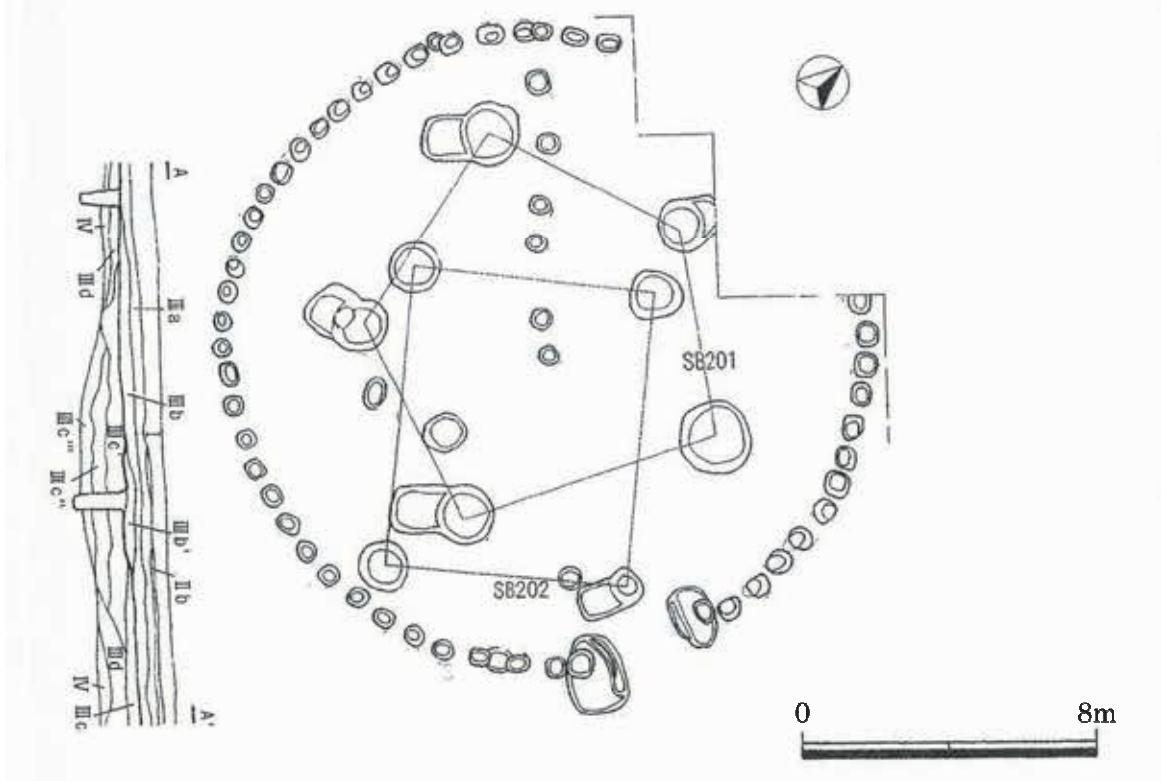
万座環状列石西側外帶

0 10m

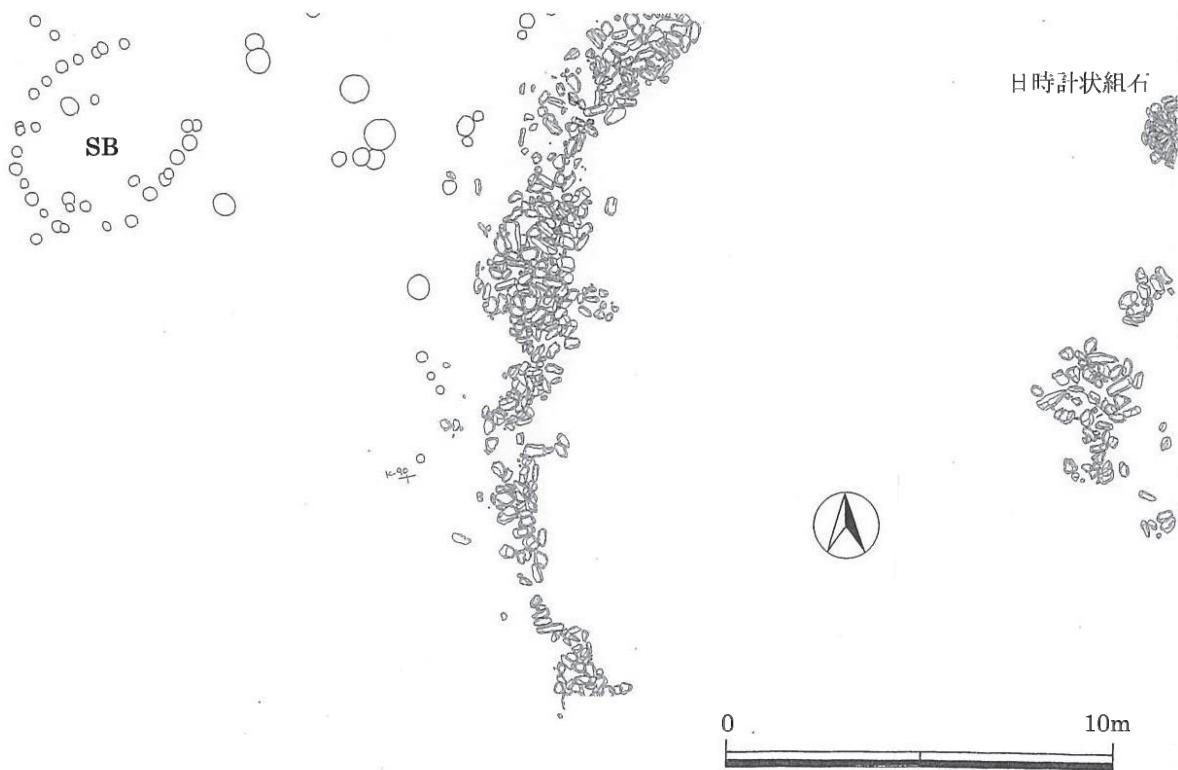
第 216 図 万座環状列石に隣接するVI類～IX類建物跡配置図(1)



第 217 図 万座環状列石に隣接するVI類～IX類建物配置(2)



第 218 図 D1 区 SB201 実測図



第 219 図 野中堂環状列石に隣接するVI類～IX類建物跡配置

次調査報告書では岩手県西田遺跡との比較・検討から葬送儀礼に伴う「モガリの場」とした。しかし、多種・大量の土製品、石製品が出土していること、貯蔵庫や平地式住居等の論考があることを考え合わせると、この建物跡を「モガリの場」として性格を特定づけすることは適切と思えない。

高屋館跡の掘立柱建物跡はII類建物のみで構成される。伊勢堂岱遺跡においては明瞭なI類建物跡は少なく、形態から大湯環状列石との違いを見出すことができる。両遺跡とも大湯環状列石と重複する時期であることを考えると、II類建物跡が環状列石構築当初に造られ、その後I類建物跡が加えられたものとも想定できる。II類建物跡からI類建物跡への変遷は万座南側等の重複からも観察することができる。

I類・II類建物跡とも環状列石と関連する遺構であるが、形態の違いがどのようなものに起因するのか、これまでの調査や遺物から明らかにすることができなかった。

掘立柱建物跡には、主柱穴を取り囲むように規模の小さい柱穴が円形に配置されるものや周溝を持つもの(第215図～219図)がある。代表的なのは万座北側地区D1区SB201である。万座環状列石において、列石に隣接する掘立柱建物跡(群)に混在し、野中堂環状列石では西側隣接地から柱穴が円環状に配置された掘立柱建物跡を検出した。調査当時、炉跡等が伴っていなかったことから掘立柱建物跡と判断したが、その構造は平地式の竪穴住居跡に類似しており、その可能性は否定できない。第I類～IV類の掘立柱建物跡との新旧関係や比較の再検討が必要である。

⑤ 壺穴住居跡(第 220 図～222 図)

16 棟を検出した。万座北側地区・同西側台地縁からは 14 棟、さらにそれらは台地に大きく入り込んだ沢によって、南北に二分(第 220 図、北側を居住域 a 群、南側を居住域 b 群と呼ぶ)される。野中堂地区からも 2 棟検出され、列石を挟み東西に 1 棟ずつ構築されている。

平面形は円形・橿円形を基調とする。柱配置によって下記のように分類した。

I 類：円形を呈するもの

a 類 柱穴が壺穴内に穿たれるもの b 類 柱穴が壺穴外に穿たれるもの

c 類 壺穴内に主柱穴を穿ち、壺穴外に補助柱穴を巡らせるもの

II 類：平面形が橿円形を呈するもの

a 類 住居内に柱穴が穿たれるもの

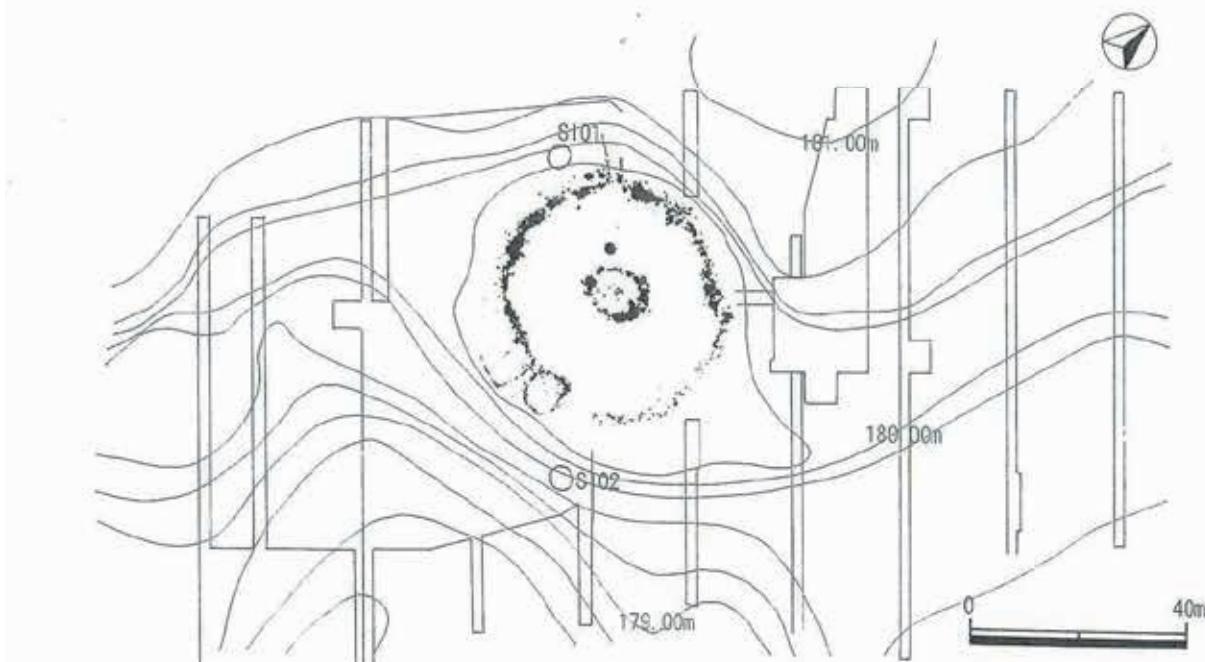
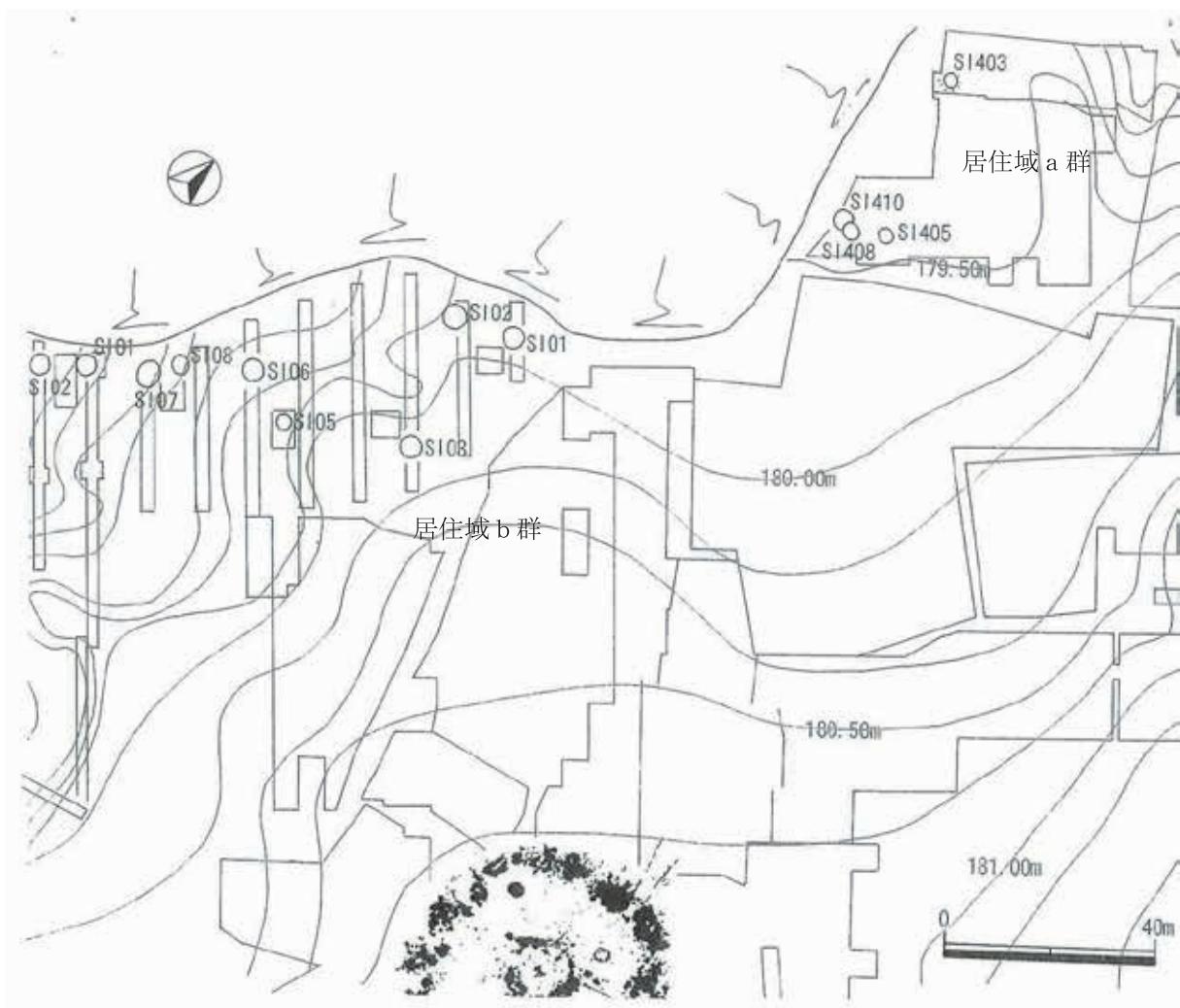
規模は、I 類が長軸 2.70m～5.00m、底面積 5.50 m²～15.2 m²、II 類は長軸 2.90m～4.70m、底面積 4.40 m²～11.80 m²を測る。居住域 a 群の住居規模は小型であるのに対し、同 b 群や野中堂地区のものは大きくなる傾向にある。床面中央またはほぼ中央に石囲炉を持つが、B2 区 SI01 のように地床炉を持つものがある。検出面から床面までの掘り込みは浅く、壁際に「コ」字状の石囲いを付設するものがある。この石囲いの用途を推察させる遺物や焼土・炭化物などは検出されなかった。市内の赤坂 A 遺跡や居熊井遺跡でも、同時期の同様の石囲いを持った壺穴住居跡が検出されている。いずれも掘り込みが浅く、小型で、壁際に石囲いを持つものであり、本遺跡で検出された遺構と類似している。本遺跡に近い黒森山山麓遺跡から複式炉を持つ壺穴住居跡が検出されていることから、これとの関連を考慮する必要がある。

重複関係は、居住域 a 群で SB401⇒SI405、SI410⇒SI408・SK449、SK446～448⇒SI405 の切り合いかみられ、掘立柱建物(群)⇒壺穴住居跡⇒土坑(群)という遺構の移り変わりが読み取れる。同 b 群では SK(T)8⇒SI05、G4 区 SI01⇒SK(F)09、同区 SI04⇒SK(F)07 等の切り合いかみられ、大まかであるが T ピット⇒壺穴住居跡(群)⇒フラスコ状土坑(群)という遺構の流れを読み取ることができる。

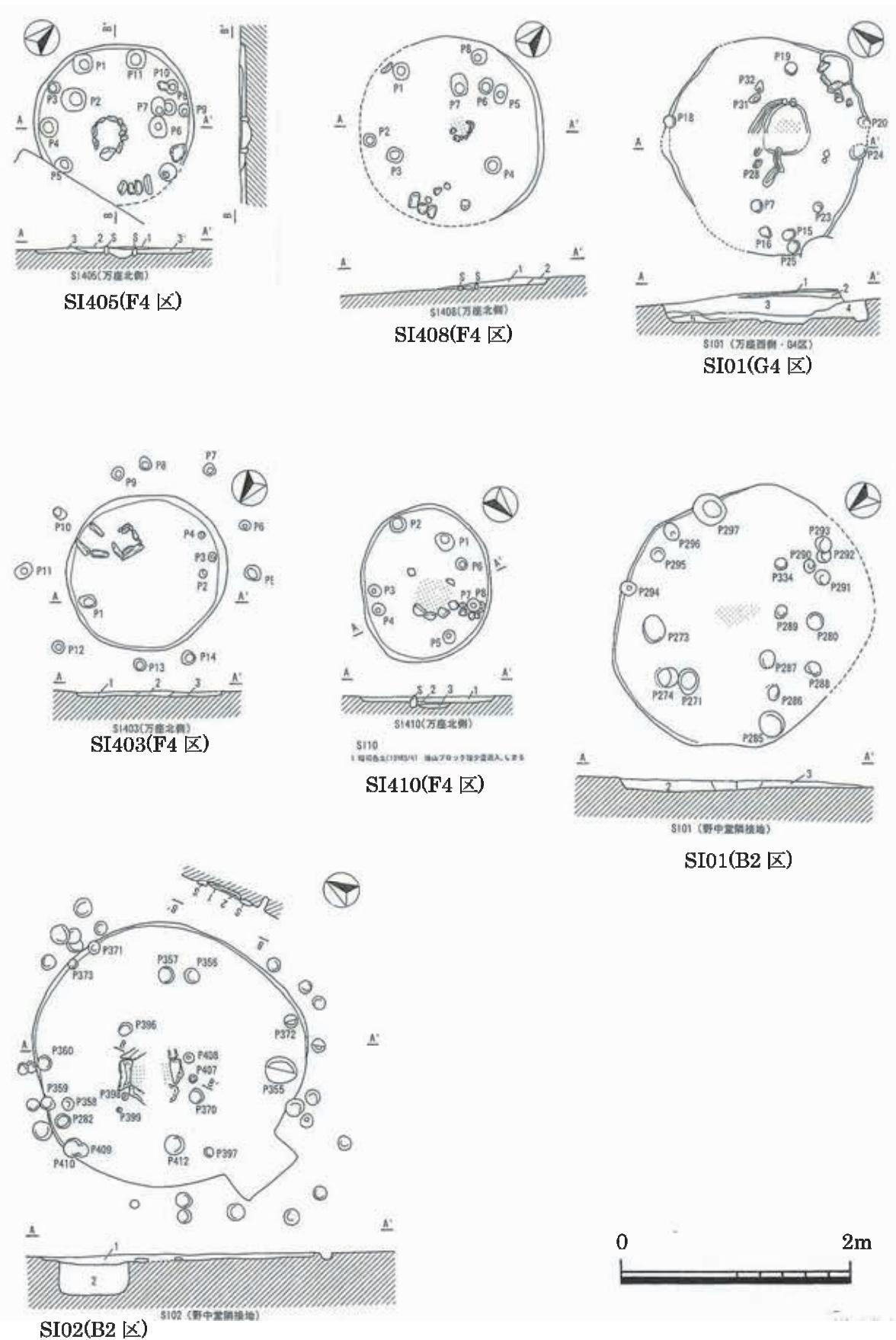
一方、野中堂地区では、SK(F)186⇒SB209⇒SI01 と遺構の移り変わりを読み取ることができ、同地区については(環状列石+土坑・フラスコ状土坑)⇒(環状列石+掘立柱建物跡)⇒(環状列石+壺穴住居跡)という遺構の変遷をたどることができる。

遺構内からⅢ群 3 類(後期前葉・十腰内 I 式)～Ⅲ群 6 類(十腰内 II 式・III 式)土器とともに、石器(搔器、凹石等)、土器片利用土製品が出土している。これらの構築・存続時期は居住域 a 群については後期前葉、同 b 群は後期前葉～中葉、野中堂地区の壺穴住居跡は後期中葉である。居住域 a 群・同 b 群は同時期に営まれていた可能性もある。

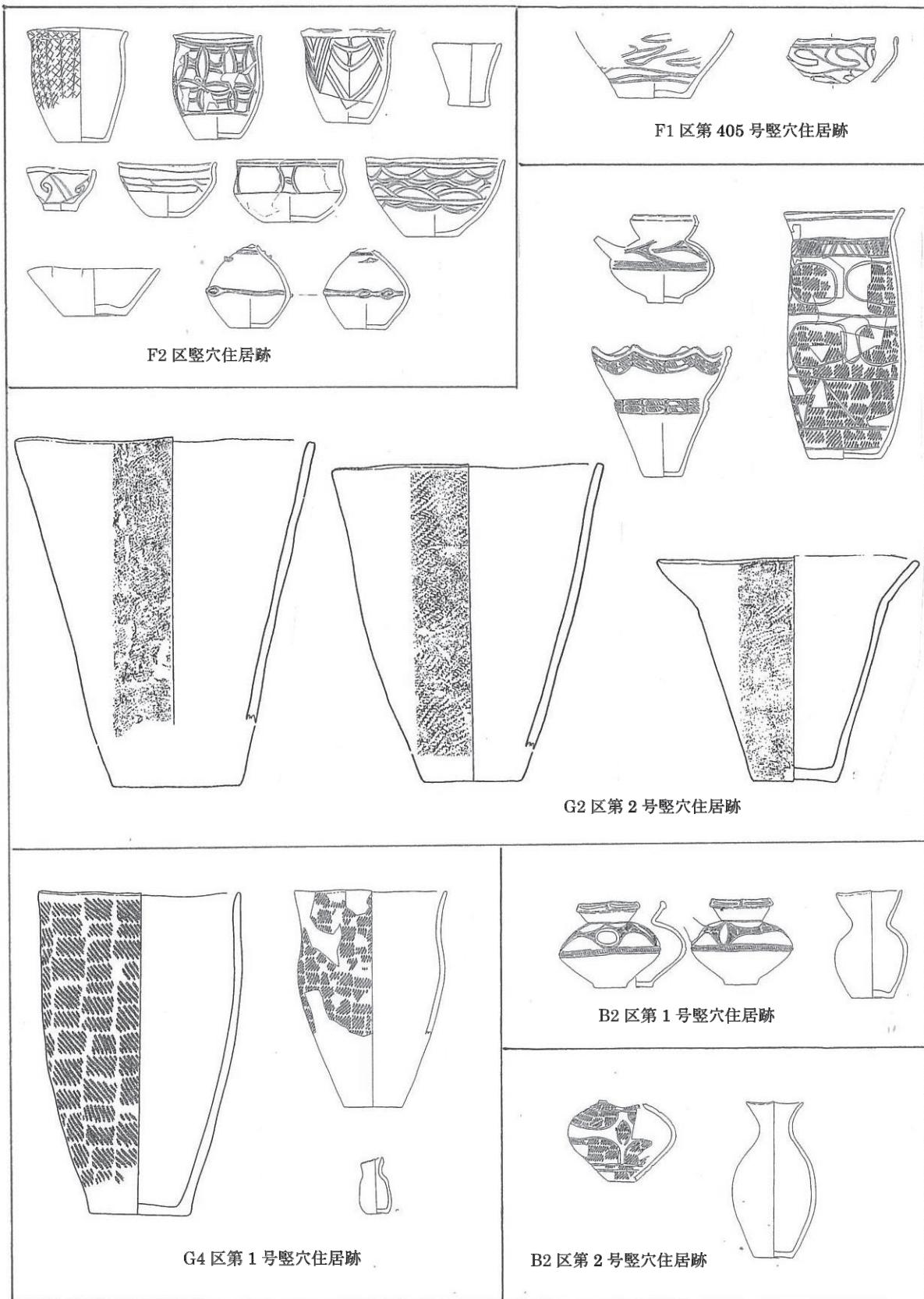
性格については居住(一時居住も含む)を目的としたものと考えられる。掘立柱建物跡で述べたように、建物跡 VI 類～IX 類が平地式の住居跡の可能性を持つことを指摘した。これらを含めると住居跡は増え、大湯環状列石は、墓域を中心に据えた居住域と推察することができるが、環状列石の存続期間と比較すると住居跡の数が少ないと考えられる。列石の存続期間、環状列石を構成する配石(墓)数から、どのような規模の居住域と構成人数を想定すればよいのだろうか。このような要因から環状列石を構築した人々の集落をここから少し離れた地域に求めた。第Ⅱ章で述べたように、その範囲を環状列石の構築材の採取地を考慮した半径 5 km とし、確認調査を実施、小清水遺跡、下内野 II 遺跡、小黒森山遺跡等を確認した。



第 220 図 積穴住跡位置図



第 221 図 堪穴住居跡実測図



0 20 cm

第 222 図 堅穴住居跡出土土器

⑥ 壇穴遺構(第 223 図、224 図)

5 基が検出された。いずれも万座地区、同北側地区(第 224 図)である。

平面形は、円形または橢円形を呈する。土坑と比較し規模が大きいもの、壇穴住居跡と同程度の規模を持つが炉跡・柱穴を伴わないものを壇穴遺構とした。

規模は長軸 2.38m～5.2m、底面積 3.53 m²～19.57 m²を測る。

柱穴や付帯施設の有無から次のように分類した。

I 類：平面形は円形又は橢円形を呈し、石囲炉等の施設を有しないもの

II 類：平面形は円形又は橢円形を呈し、出入口施設や柱穴を有するもの。

さらに柱穴の位置によって、a 類（遺構内に穿たれるもの）、b 類（遺構外に穿たれるもの）に細分される。

重複関係は、D1 区 SK245⇒ST202、D1 区 ST201⇒SB201・202⇒SX(S)202 環状配石、F1 区 SI405⇒SI404 である。

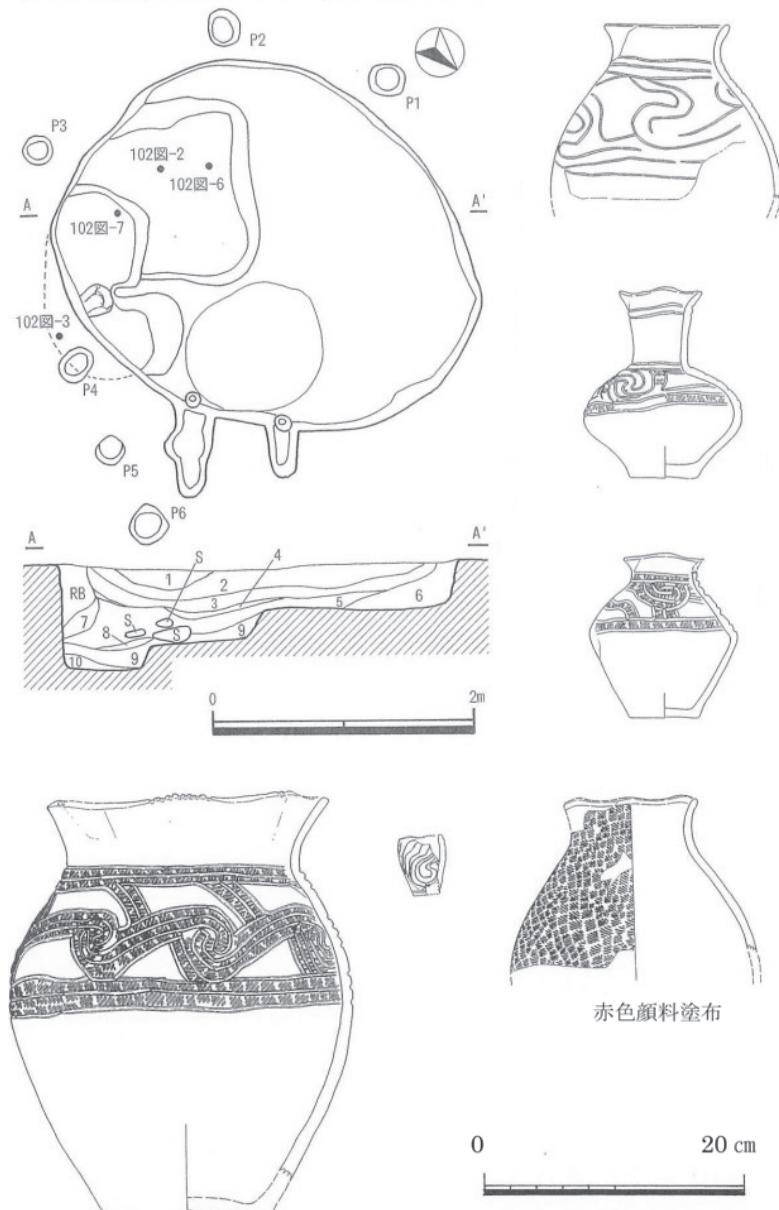
本遺構中で最も特徴的なものは D1 区 ST201 (II b 類、第 223

図) で、万座北西側に入り込んだ沢頭地域に位置する。平面形は橢円形を呈し、遺構北東側に出入口状の溝状の張り出しを持つ。底面は 3 段構造となり、最も低い底面の壁面はオーバーハングする。復元土器 8 点、土偶・鐸形土製品各 1 点、櫛(結歯式)1 点、石鏃 1 点(櫛に接して)が最も低い底面から出土している。また、ST406・407(II a 類)からも土製品や石製品が出土している。

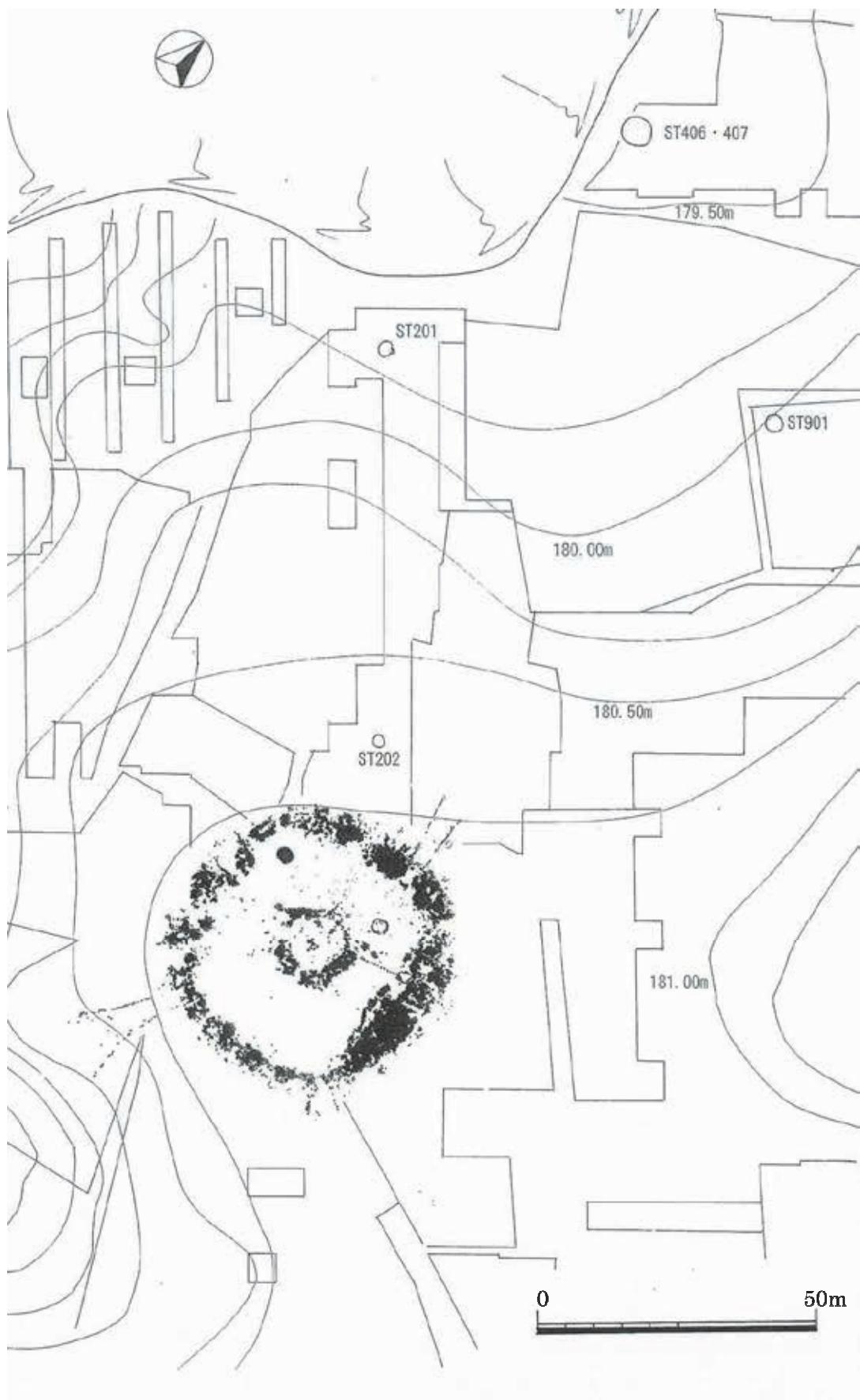
重複関係を示すものもあり、F1 区 SI405⇒SB401⇒ST07⇒ST 06 である。

構築時期は後期前葉の十腰内 I 式古～新段階と考えられる。

性格は、ST201、ST406、ST407 については出土品から葬送儀礼に係るものと考えられるが、この中でも赤色顔料を塗布した土器、櫛等といった特殊な遺物を出土した ST201 については、土坑墓としての性格を強く感じる。



第 223 図 D1 区第 201 号壇穴遺構と出土遺物



第224図 竪穴構造位置図

⑦ 土 坑(第 225 図、226 図)

487 基の土坑が検出された。平面形は円形、橢円形、方形を呈し、橢円形のものが全体の約 69%を占める。規模(径・長軸・一边)は 30 cm～311 cm を測り、小型・中型・大型に分類することができる。橢円形土坑で環状列石の同心円を構成する土坑群内に位置するものは、その長軸を列石の中心を向けるものや直交するものが見受けられ、掘立柱建物跡と同様に列石を意識した配置をとっていたことを読み取ることができる。

堆積土は人為に埋め戻されたもの 87.7%、自然堆積 3.1%、不明 9.2% で人為堆積のものが圧倒的に多い。

土坑内から遺物が出土するものは全体の 64.2% で、完形・復元土器(深鉢・鉢・壺・片口、蓋形土器)、石器、土製品(鐸形・キノコ形・土偶・耳栓等)、石製品(イモガイ・円盤状・球状石製品等)、自然遺物(炭化堅果類)が出土するが、総量ではプラスコ状土坑に及ばない。

特徴的な分布が万座・野中堂地区に見受けられる。第 226 図は万座地区の分布で、万座環状列石の北側出入口状施設から反時計回りに東側出入口状施設にかけて分布密度が濃く、所々に 10 数基が重複・集合する群を構成する。一方、北側出入口状施設から時計回りで東側出入口状施設にかけての密度は薄く、同環状列石東側の土坑や外帶配石帯の濃淡と反比例していることが読み取ることができる。野中堂地区の分布(第 227 図)は、万座と比較し全体的に密度が薄いが、万座と同様に密集する地点がみられる。

構築時期は、Ⅲ群 3 類～同 4 類、後期前葉の十腰内 I 式古・新段階が主体である。後期中葉と判断・推定したのは万座地区の D1 区 SK219、SK228、D2 区 SK300、D3 区 SK314A・SK338 など数が少なく、列石構築時期に集中して構築されたものと考えることができる。

性格については、万座・野中堂地区に位置する橢円形土坑は列石の存在を意識した配置を示し、人為堆積のものが多いこと、副葬品と考えられる土製品・石製品が出土するものがあることから、土坑墓と考えることができる。円形・方形土坑についても万座・野中堂地区に分布するものは土坑墓と認定してよいものと考えている。また、万座北側地区で検出された土坑も人為堆積であり、完形土器や土製品・石製品を出土するものがあることから土坑墓と考えられる。

⑧ プラスコ状土坑(第 227 図～234 図)

野中堂地区、万座地区、万座北側地区等から 298 基を検出した。微高地を選び十数基構築するものもある。

土坑断面形からⅢ類 2 亜種に分類した。最も多い形態は、所謂「プラスコ状ビーカー」形を呈したもので全体の 57% を占め、その他に「長靴状」を呈した歪なものや掘り込みが極めて浅いものがある。

堆積土は、人為的に埋め戻されたものが圧倒的に多く、全体の 91.5% を占める。また、構築時の排出土(黄褐色土)を隣接するプラスコ状土坑に投げ込むもの、堆積土中に焼土粒や炭化物、炭化堅果類が多量に混入したものがみられた。

第 227 図に万座地区の分布図を示した。同地区の土坑分布に類似した状況を示すが、重複や密集度合は低い。万座地区では北側出入口施設から反時計回りに東側出入口施設の密度が高く、同東側出入口施設から北側出入口施設にかけての密度は低い。さらに、前者は外帶配石の間近まで遺構が分布するのに対して、後者は列石外帶配石とプラスコ土坑分布域の間に空白域